紅色に染まる夏

備前長船長光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅色に染まる夏

【Ｎコード】
Ｎ８００８Ｘ

【作者名】
備前長船長光

【あらすじ】
かつてこの世には一匹の鬼がいた
鬼は元は人だった
しかしある人を助けるために
悪鬼になった…
鬼は友を殺し
家族を殺し
己の良心を殺し
神を殺し

復讐者をも殺した
そして最後には…

ある年の夏、神那学院に兄妹が転校してきた
転校して来るはずの無い兄妹の転校により
伊東誠悟を中心とする周囲の時が歴史が狂い始める
これは、そんなお話

これは、純粋な恋愛ものではない
純愛を望む者は無用である

この話は歪んだ愛の物語である

プロローグ（前書き）

初めまして備前長船長光です
この作品が初投稿なので拙い文書ですがどうぞお楽しみください
完結させるつもりでいます

中身は恋色空模様で主人公が装甲悪鬼村正の善悪相殺
の誓いを立てたという設定の二次創作になります。

この作品は原作のイメージを崩壊させる可能性が高いので
嫌な人は絶対に観覧しないでください

残酷な描写多々出てくる可能性が高いので
そのような表現の苦手な人もぜった観覧しないで下さい

プロローグ

茜色(あかねいろ)に染まる人気のない砂浜に二人の男が立っていた
一人は夏というのにブレザーを着込みその下に帯刀している男
もう一方は白い半袖のYシャツを来ている学生だった
二人は何も言わずに夕日が海に沈む様子を　茜色に染まる空を眺めていた
その間、静かな波の音が二人を包む。
しばらく時間が静かに流れてゆく
　突然、ブレザーの男が何かの覚悟を決めたかのように唐突にYシャツの男の方に体を向けた
ブレザーの男「誠悟」
誠悟「え？」
ブレザーの男「すまない……」
誠悟「なんだ、や」
その言葉と同時にブレザーの男が剣を抜刀する
　フォン
先ず刀が風を切り裂く鋭い音がする
次に　ドサッ　と首が落ちる音がする
最後に　ドタッ　と身体の倒れる音がする
まるで操り人形の糸が切れるように誠悟は倒れた

　誠悟の体から　首のあった場所から　鮮血が吹き出す

落ちた首が
光のない瞳が
こちらを見つめる
どうして？と言いたげに…

よく惨劇の現場を血の雨が降ると形容するがまさにその通りである
ブレザーの男は紅色に体を染める
女「お兄ぃ！！」
その声にブレザーの男は振り返る、そして一瞬、驚きの表情を浮かべる。
しかし、それは一瞬だけだった次の瞬間には暗い顔をし、そしてその女の名前を呼ぶ。
ブレザーの男「美琴さんか……」
美琴「よくもお兄ぃを絶対に許さないっやッ」
そいつ(男)の名を言おうとすると同時にそいつの目が妖しく光るのを幻視した
直後
美琴（体が、動かないなんでっ、このオンボロがなんで今動かないの？）
ブレザーの男「心ノ一方をかけた……お前にも謝る……すまん…な」
美琴（しんのいっぽう？）
そう言うとブレザーの男は刀を肩に担ぐようにしてこちらに向かってくる
ゆっくりと、しかし、確実に歩いてくる、私を殺すために…
悲しそうに血の涙を流して笑いながら

私はその時、思い返していた
あの楽しかった日々を
悲しい事もあった日々を
大変だった日々を…

男がついに私の前まで来る
それはさながら死神のようだった
それは(死神)今、正に私の命を刈り取るだろう

そう思ったと同時、死神(男)は刀を振り下ろす
　私は、斬られる刹那の瞬間が一秒にも一分にも感じる最中に思った
その人と居る時お兄いが一番楽しそうにしていた事を
もう一度、見たいと思った優しい笑顔のお兄いを
もう一度…来世なんて要らない替わりに、あの日々に戻りたいと願った
あの皆で頑張った夏に戻りたいと…
それがその少女の人生最後に思った(願った)事だった

男は、美琴のデスマスク(死に顔)を記憶に残しそして十六夜(いざよい)を眺め月明かりに血刀(けっとう)をかざしながら言葉をつぶやき始める
ブレザーの男「すまんな…俺はまだ死ねないんだ……そう……
…まだ」
　男はそうつぶやくと血振いし刀を鞘に納める
そして、歩き出す人を殺(あやめる)すために
その道中楽しかった日々を思い返しながら
戻れるものならば戻りたいと思いながら…
男は、歩いて往く…修羅という名の道を……

プロローグ（後書き）

次回より主人公設定などを公開します
遅くとも月一で公開しますのでよろしくお願いします

人物紹介（前書き）

備前長船長光です

恋色空模様を恋愛ものとして書かれている人が沢山いるので
私はダークの方向で書こうと思いました
この小説は原作のイメージを壊したく無い方まだ未プレイでこれか
らプレイする
予定の方は観覧しなでください
それでも見たい方は自己責任でお願いします
主人公の名前や妹の名前あと家族の名前など色々な裏設定が隠され
ているかもしれませんので最後まで観覧していただける方はお楽し
みにしていてください
それではよろしくお願いします

人物紹介

人物紹介

八雲八坂（やくも　やさか）

本作の主人公

年齢　１６歳　高校２年

誕生日　８月８日

身長　１７８？

体重　６８ｋｇ

体格　筋肉質

趣味・特技　睡眠　料理（プロ級の腕前）

学業成績　優秀・常に五教科７０点を取っている（本当は１００点を取れるのだが残り３０点分を珍回答に費やしている）

ただし英語は聞き取りとペーパーテストは大丈夫だが発音が苦手のようである

嫌いな物・事　正義　殺人　マヨネーズ（食べると気分が物凄く悪くなるらしい）　トマト　女性

好きな事・物　日々の稽古　刀の手入れ　掃除

性格　冷静沈着　ぶっきらぼう　無口　努力家

一人称　私（わたし）　私（あたし）　私（わたくし）　俺　自分　わし　小生　等（など）その日の気分によって常に違う　メインは私（わたし）　俺

東京の学校から神那学院に転校してきた

誠悟とは親友だった（本人談）

主人公の家は代々刀鍛冶なので主人公も刀鍛冶であり

技術を余す所なく受け継いでいる

同時に家伝の武術も受継いでおりその腕前は相当の物だと言われている。
実は拳銃や小銃なども使えるらしい。
なぜか良く解らないがガラの悪い人や武術家崩れなどに喧嘩を売られる（誠悟曰くその様な人を寄せ付ける念波が出ているらしい）
苦手な相手は銃剣を使う人間

ある事件を境に髪が白髪になってしまった
同時にその事件で右目と右肩に武術家生命を失うほどの重傷を負ったゆえに外見的特徴としては右目には刀傷があること（見えないというわけではないのだが
光に弱くなっているため夜にしか目を開られない）
右肩も動かせない訳ではないのだがある一定の角度に達すると激痛が走るらしい
名前の由来は家に代々伝わる刀剣　伝　村正　の銘が　八坂だからと言われている。

主人公の愛刀
略式九八式下士官軍刀　刃長　６６．７？　反り２？　無銘　祖父の最高傑作にして唯一つの遺品
木目調の仕込み杖　刃長　６６．７？　反り１？　伝　村正　号
八坂　家伝の名刀
他にも刀が多数あるが主に今使っているもの

あまり妹にかまわないが大切に思っており妹を命をかけて守るべき存在だと思っている
妹を嫁として貰い受ける条件は自分を倒す事と命をかけて守る事が出来る相手にしようと思っている

あまり弱点の無い完璧超人に見えるが　猫舌や乱視　など細かい

弱点が沢山ある
余談だが本人は無痛症であり痛みを感じないこの事を知っているのは彼の家族だけであり現在は唯一の肉親の妹だけである

八雲月星（やくも あかり）

主人公の妹
年齢　15歳　高校1年
誕生日　8月12日
身長　154？
体重　非公開　ただ八坂曰く軽いらしい？
趣味・特技　兄の世話　花嫁修業？
学業成績　八坂ほどではないが60点を切った事が無い
嫌いな物・事　兄以外の男性が苦手（誠悟以外）　姉（故人）
好きな物・事　兄　兄の傍に居る事　兄の手伝い　兄の作る料理
性格　天真爛漫？　真面目？
一人称　私（わたし）
兄に付いて東京から神那島まで一緒に来る
兄の事が大好きだと公言しているが当の八坂はほとんど無視している模様
兄妹で結婚できるようにするべきだと本気で思っている
同年代の女性に比べると小柄な割に体力と運動神経がいい
兄が片手と片目しか使えないのでその代わりになりたいと思っている
八坂の前では怒らないが八坂が居ない所では気に入らないと怒るらしい
誠悟曰く怒らせると物凄く怖いらしい（トラウマになる人が10人に1いるくらい）
実は本当の兄妹ではない事を知っており隠している（この事を八坂

は知らない）

人物紹介（後書き）

どうだったでしょうか？
と言われても困りますよね
次回からお話に入ります
主人公の家族の名前などはその時になったら
投稿しますのでよろしくお願いします
できれば感想をお願いします
今後の参考にする予定です

第壱話　再会《異説》そして始まり（前書き）

皆さんお待たせしました
やっと第壱話が完成しました
出来はあまり良くないので
後ほど修正するかもしれません
まぁとにかく皆さん
楽しんでください

第壱話　再会《異説》そして始まり

突然だが　俺達兄妹は今　冷房のきいたタクシーの中に居る
神那島大橋を渡っているもなかだ（最中）

え？　俺は誰かって？
俺の名前は　八雲（やくも）　八坂（やさか）だ　これからよろしくな

てっ　俺は一人で何をやっている？
アホくさッ

とっ、話に戻ろうか

なぜ、わざわざ本土からこんな島まで来なければならなくなったのか
それは簡単な話だ…
退学になったから転校した　それだけの話だ
何故　退学になったかって
それは後ほど話しましょう
きっと後で　回想　とか　夢　とか　何かで話すことでしょう
忘れなければ。
運ちゃん「にーさん、仕事何やってる人？」
運ちゃん「にーちゃん」
俺（この上なく運ちゃんがウザイ）
俺「うぜぇよ、話しかけるな」
俺「それより運転に集中しろよ……」
俺（そんな質問されても無理ないか…この見てくれじゃぁな……）
運ちゃん「……」
俺「……」

運ちゃん「……」
俺「……」
運ちゃん「……」
俺「……」
妹「スウ　スウ　スウ」
運ちゃん・俺（会話が無くなった……非常に気まずい）
運ちゃん・俺（早く時間よ過ぎろ）
そんな二人の願いが通じたのか二分ほどで目的地に着いた。
運ちゃん「お客さん着きましたよ」
運ちゃん「１８９６２円です」
俺「二万円からよろしく」
俺「おい、月星（あかり）着いたぞ、起ぉきぃろぉ」
月星（あかり）「うぅぅん、よく寝た」
俺「本当にな」
運ちゃん「えっとお釣り１０３８円ね」
俺「はいよ」
そして俺たちはタクシーを降りた
　バンッ
そしてタクシーはすぐに見えなくなった
まず島に着いたのはいいとする
どこに泊まろう，まぁ最悪野宿……だな…
　ハァ　金があっても泊まる所がなきゃ　それこそ宝の持ち腐れだよなぁ～
この島に住むかは、まぁ明日学校に行って、資料を出して試験を受けてみないことには判らないしな
月星「お兄様、何を考えているの？」
八坂「あぁん、ちょっとな」
月星「まさか、他の女の事ね！」
月星「私というものがありながら！」
八坂「何故そうなる、だいたい何時からそんな関係になったんだ！」

月星「何時からなんて酷いわ、私はこんなにお兄様の事を愛しているのに」
八坂「はいはい、俺も丼いっぱい愛してるよ」
八坂「そんな事より、今夜の宿だ」
月星「そんな事ですって！」
八坂「何だろすごく頭が痛くなってきた」
月星「お兄様、風邪を引いたの！」
月星「それは大変だわ、今すぐ休みましょう、そこらへんの茂みの中で」
八坂「あ、なんか治った、もう大丈夫」
月星「本当？」
八坂「ホント　ホント、もう一？　全力ダッシュできそうなくらい」
月星「そう」
八坂（なぜそこで落ち込むのだ、マイシスター）
妹のことが全然わからない

八坂（はぁ　だるいな、これからどうすっかな）
　パァァァン
八坂（銃声？）
　（それも猟銃じゃない、トカレフのものだ！）
　（俺の耳が正しければあいつの物だ！）
俺は考えながら無意識のうちに愛刀の入ったバッグを肩にかけ
俺は走り出すその銃声の元へ
その最中に俺は幻聴（きょうだい）いた義兄弟の声を

＊少し時間をさかのぼり、神那島では

チンピラA「兄貴！伊東誠悟がいやした、それも女連れですぜ」
兄貴風の男「そうか……分かった」
誠悟「彩、そろそろ帰るか？」
彩「今日の夕飯は何なのせいちゃん？」
誠悟「今日はから揚げにしようと思うのだがどうだ？」
彩「わふっやったぁー」
兄貴風の男「失礼、つかぬ事を伺いますが伊東誠悟さんですね」
誠吾「そ…そうですけど何か？」
兄貴風の男「八雲八坂（やくもやさか）さんをご存じですね？」
誠悟「はい、知ってますけど何か？」
兄貴風の男「どこに居るんですか、家（うち）の若いもんがこの島に居ると言っているのですが」
誠悟「知りませっ　ゴブッ　ゴホッ　ゲホッ　ゲホッ」
誠悟が否定しようとすると兄貴風の男がいきなり誠悟の鳩尾を殴りつける
彩「せいちゃん！！」
チンピラA「動くんじゃねぇ」
チンピラAはそう言うと鈍く黒光りするテレビでおなじみのあれを周りに見えないように彩に突き付ける
兄貴風の男「お嬢さんあまり騒がないでいただきたい…あなたが騒げばこの男を殴る、誠悟さん　あなたが騒げばこの女を殴る」
彩「ッ！」
誠吾「なッ！」
兄貴風の男は言った、それは冗談などでは無かった男の眼はそう告げていた
兄貴風の男「そう言えば人気のない海岸がありましたねぇ、そこでゆっくり話しましょうか」
誠悟「ふざけッ」

ドスッ
彩「ゴホッ」
兄貴風の男は本気で彩の鳩尾を殴った、しかし、彩はその一撃で落ちてしまう
だが男はそれにかまわず、もう一度次は腕を振り上げる
誠悟「待ってくれ、分かったから…頼む……」
誠悟がそう言うと男は振り上げた腕を下ろした　そして、海岸へと向かう
ガチャン
店のおばちゃん「ひっ」
チンピラB「何してるの？　俺らはただちょっと尋ね事をしてるだけだからさぁ」
兄貴風の男「何をしている！　さっさと行くぞ！」
そう兄貴風の男が言うとチンピラBはあわててはしりだす余程怖いに違いない…
チンピラB「ヘイッ、すいませんでした　今行きますッ」

海岸に着くと男の尋問が始まった
誠悟と彩は身動き出来ないように木に縛り付けられている
更に彩は喋られない様、猿轡（さるぐつわ）までされている

兄貴風の男「で　誠悟クン　八坂はどこに居る」
誠悟「わからない」
チンピラA「あぁ？　分からねぇだ　ふざけんじゃねぇぞ」
兄貴風の男「ははははははは」
男はいきなり笑いだす　それにつられ誠悟も
誠悟「ははは…ははははは」
兄貴風の男「何がおかしい！」
突然　兄貴風の男が怒り出し
上空へ向けて一発、発砲する

そして、兄貴風の男は鈍く黒光する物を俺に押し付ける
男は言った
兄貴風の男「お前はもう用済みだ、死ね」
彩「ふぇうぃふぁん！」
男は誠悟の中に銃口をねじ込みながらそう言い放つ
兄貴風の「バン」
誠悟「ヒッ」
兄貴風の男「てっ、本当に撃つわけないだろう」
そう言って男は海の方へ弐拾歩ほど歩く
それを見た誠悟は思わず息が漏れる
誠悟「はぁ」
誠悟が息を漏らすと同時に男は振り返り
銃を両手で構えながら言い放つ
邪悪な笑みを浮べて
兄貴風の男「てな事言うわけ無ぇだろうが！」
兄貴風の男「こちとらマフィアだぜぇ、殺しなんて何とも思うわけ無ぇだろうが」
誠悟「ヒッ」
誠悟（やだ、やだ、まだこんな所で死にたくない）
誠悟（誰か、助けてくれ）
兄貴風の男「まぁ、お前殺しても金にならないしな」
男はそう言い放ち銃をおろす
誠悟（よかった、これで助かる…）
だが、男はまた銃を構える
素人目に見てもいかにも精密射撃の構えである
そう構えながら男は話し始める
兄貴風の男「でも、顔を見られたからには殺すしかないんだよ」
言葉を発し終えると同時、男は発砲する
　パン
男が撃った弾は誠悟からは大きく外れ縛り付けてある木に当たった

兄貴風の男「でも、まぁ、そうですねぇ」
兄貴風の男「八坂の居場所を教えてくれたら何もしない、約束しよう」
誠悟「本当に知らないんだ！」
誠悟「本当だ、信じてくれ！」
誠悟は目に涙を浮べながら男に助けを懇願する
だが、しかし、男はニヤリと邪悪な笑みを浮かべ
銃口を誠悟に向ける
そして男は、ゆっくりと人差し指に力を入れ始める
男が指に力を入れ始めたとき四人の人間の思考が交差する

＊彩　視点
（このままじゃせいちゃんが殺されちゃう）
（誰でもいいからせいちゃんを助けて）
（せいちゃんを助けてくれるなら…）
（神様でも）
（悪魔でも）
（何でもいい）
（私の命と引き換えでもいい…）
（だから…だから…誰かせいちゃんを助けて！）

＊兄気風の男　視点
（こんな奴を殺してもつまらんだけだ）
（だが…だがしかし）
（こいつを殺せば、あいつは怒るだろう）
（本気の剣を、見せてくれるだろう）
（俺は、俺の復習を果たし、あいつと殺しあえる）
（そのために、俺は、この男（伊東誠悟）を殺す）

（あいつにも俺と同じ苦しみを味合わせる事が出来る）
そう、故に俺は笑いながらこいつを殺すことが出来る
「さようなら、伊東誠悟君」

＊誠悟視点
（こんな所で死にたくない）
（誰か助けてくれ）
そんなことを思っているはずなのに
頭の中ではすでに諦めているのを感じている
それは、死を、受け入れたからだ
不条理でも、死を受け入れてしまったからだ
そんなことを考えている時
ふと思う　妹の美琴の事を
（ごめん、美琴、俺、今日、死ぬみたいだ）
眼前の男の指に力が入る
その瞬間がコマ送り再生される
一分にも一時間にも思えるほどの遅さで
（次の瞬間には俺は死ぬのだろう）
そう思うと、誠悟は一人の男の事を思い出した
東京に居た時の親友のことを
いつもピンチのときにヒョッコリ現れ
助けてくれる男の事
そして、男と初めて話した時に言われた事を
男（ピンチになったら、助けが必要になったら
　俺の名前を呼べ、何時でも駆けつける）
男（俺の名前は）
兄気風の男「さようなら、伊東誠悟君」
　八坂！

＊八坂　視点
（見えた！）
（ここに来る前に麻酔は打った　問題ない）
だが、しかし、少々遅かったようだ
黒の高級そうなスーツを羽織った男は
誠悟に銃口を突きつけていた
声は聞こえない
しかし、男が何を言っているのか理解は出来た
「さようなら、伊東誠悟君」
それを理解した瞬間、時間が急に遅く感じる
俺の足が遅く感じる
（間に…合わない…のか？）
（また、間に合わない？）
（また…）
（そんなのは、もう、ごめんだ）
あそこまでひと翔け出来る翼が欲しい
それがダメなら時間だ
そう、時間が欲しい
　八坂！

イッソ、ジカンガトマッテシマエバイイ

（どうしたのだろう周囲時間が時の流れが
　止まったような気がする，周囲が色あせる）
（だが、しかし、これで間に合う！）

パァァァン
誠悟（銃声？）

誠悟（何で？）
誠悟（そっか、きっと、痛みを通り越して感じないのか）
男の声「あ～あ、勿体ねぇ
　　おろしたてのスーツなのにな」
男の声が聞こえる
男の声「兄弟、待たせたな」
一瞬誰か理解できなかった
しかし、それは俺が待ち望んでいた者の声であった
懐かしい白髪
悲しそうな瞳
見間違え様の無い目の刀傷
そして、本人も言った見慣れたデザインの
漆黒のスーツ
誠悟「八坂？」
誠悟「本当に八坂なのか？」
八坂「俺以外に八雲八坂が居てたまるか」
八坂はそう言いながら左腰に帯刀している軍刀を
左手で抜き、誠悟と彩の体を縛っているロープを斬る
そして、八坂はお気に入りのスーツを脱いで誠悟に渡す
八坂「それ着てそこの影に女と二人で隠れてろ」
彩（願いが通じた）
　（せいちゃんを助けるために，神様は願いを聞いてくれたんだ）

誠悟「彩、隠れるぞ」

せいちゃんを助けてくれた人は
暗い瞳をしていて
だけどすごく優しそうな男の人
それが、私の八雲八坂への第一印象でした

兄貴風の男「八坂！」
八坂「なんだ、五月蠅いな誰だ？」
兄貴風の男「なっ、忘れたとは言わさんぞ」
八坂「すまん、忘れた、弱い奴は覚えてないんだよ」
兄貴風の男「俺の名前は、高田重行（たかだしげゆき）だ」
八坂「高田？」
八坂「高田、高田…高田」
八坂は男の名前を幾度かつぶやき、ややあって
思い出したと言わんばかりに手のひらをポンと打つ
八坂「思い出した、あの雑魚か」
八坂「お前なんかどうでもいいんだ、邪魔だ、とっとと、どっか失せろ」
高田「……雑魚ォ？」
男の声調が変わる
何も考えずに発した八坂の一言は、どうやら
いわゆる地雷だったらしい
先ほどまで草食獣のような人間だった高田が肉食獣へと変貌する
そして、肉食獣は、うなりを発する
高田「あぁ、今なんて言った、てめぇ…雑魚って言ったのか？」
八坂「なんだ？、もしかして禁句？、プライドにかかわる言葉だった？」
八坂「悪ぃ悪ぃ、俺は言わなかったことにしとくから、
　お前も聞かなかったことにしといてくれ」
高田「なんて言ったかって聞いてるんだよ」
八坂「邪魔じゃないけど、どこかに行ってくれませんか
　ハンサムなお兄さんって言ったんですよ。きっと。多分」
高田「雑魚って言ってんだろうが！！」
八坂「解ってんなら聞くなよカス。あっ、いや、えっと、縮緬雑魚（ちりめんじゃこ）
　のような星空だなって言っただけですよ。常に新しい表現の
道を模索する

風流な俺。」
高田「……」
高田には納得した様子が伺えない
今にも発砲してきそうな気配ならば、この茜色の空模様の下にも明らかである
ついでに言うと逆光で物凄く見づらい
どうやら説得は失敗に終わったようである。
火に油を注ぐつもりは毛頭無かったが素で受け答えをしたら
結果がこうなってしまったらしい。
自分の事なのに、まるで他人事のようである。
しかし、気が付くと俺は刀を鞘に仕舞そして居合いの体制をとっていた
その自分の体制を見てから、相手の表情を見ると、怒りが加害行動を生まずに
収まるラインをとうの昔に過ぎていたので、なるほどと自分に感心した
高田は抜刀する。しかし、そこには殺意が無かった。
高田は、抜刀した刀を上へ掲げる、一見片手上段の構えをとったかに見えたが違った
上げた刀を振り下ろしその切っ先を俺へと向ける
高田「突貫！」
八坂「なっ！？」
高田はそう言うなり、を蜻蛉の構えにて手下三人と一斉に切り込んでくる
猿叫を上げて
並みの者ならばそれだけで気死する事だろう
肝を潰すだろう
八坂とてほんの一瞬、肝を潰しかけた
八坂「っ」
しかし、流石は八雲流活殺術、現当主である

冷静に相手のとの距離を測る
高田と手下の間には５ｍほど有る
俺はまず突っ込んできた高田を左足をさげそしてそれを軸に時計回りにかわす
八雲流活殺術　居合技　沓掛（クツカケ）
そして本来ならば　抜刀　し　斬り付け　殺す
が、今はそのようなことは出来ない（人斬り）
その代わりに手刀を見舞う、すると
男は派手にコケそして盛大に転げまわる男の剣は八坂から３ｍほどの位置に落ち
その担い手はそこから更に８ｍほど吹っ飛んだ。
吹っ飛んだ高田は今はとりあえず無視し
手下の三人に意識を向ける
三人は同時に並んで迫ってくる
流石の八坂もこれを避けるのは至難の業だ
三人が同時に飛びそして刀を振り下ろす
八坂はそれを見て抜刀する
八坂（八雲流活殺術　秘剣　〇閃）
　パキン
と甲高い音を鳴らし参振りの刀が虚空へと吸い込まれるように折れ飛ぶ
男たちは八坂の眼前で止まっている
先ほどの高田との実力の差はあまりに大きい
俺は跳ぶそして体を回転させる
まず右足で右に居る奴の後頭部に一撃
そしてその反動を利用し左足、踵で相手の顔面を強打そして左足をそいつの肩に置き上へ
跳ぶ
そして宙にて一転し脳天と強打する
（八雲流活殺術　無刀技　破壊の舞（ブレイクダンス）参連撃）

八坂は膝を曲げ着地するそして振り返る
（八雲流活殺術　居合　秘刃　〇閃編隊伍機）
キン　チン　パキン　バキ　カチン
空から先ほどの刀の残欠が降ってくる俺はそれを切り捨てる

俺は起き上がる高田に刀を投げ渡す
高田「何故？」
高田は問う
俺は答える
八坂「勝負したいんだろ？、だったら決着つけようぜ」
高田「いくぞ！」
そう叫び、太刀を蜻蛉に構える
高田「キェーーーーーーーーーーーーイ」
猿叫を上げこちらに向かってくる
俺は帯から刀をはずし左手に持つ
死が近づいてくる
一歩、壱歩
俺は剣を抜く
そして相手の剣を刃を心を闘志を両断する
左の鞘で相手の側頭部を強打し意識を奪う
（八雲流活殺術　居合　二段抜刀術　双龍閃壱之型）
俺は勝った、しかし、何も思わない
自らよりも弱き者を倒して歓喜など出来ない
歓喜するほど俺は自惚れてはいない
いや、その思いこそが自惚れなのだろう
俺にはもっと強い敵が必要（い）る何時会えるかは判らないが
しかし、近い内に合えるそう信じている
誠悟「八坂！」
誠悟が女と一緒に走り寄って来る
八坂「おう、兄弟！、大丈夫だったか？」

誠悟「ぜんぜん、大丈夫じゃない」
八坂「だろうな、そんだけ顔腫らしてたらな」
誠悟「じゃ、聞くな」
八坂「それもそうだな」
誠悟「それより、どうしてこんな所に居るんだ？」
八坂「それは…こっちの学院に転入するためだ」
誠悟「それはずいぶん急な話だな」
誠悟が驚く　まぁ　無理も無い
八坂「あぁ、ちょっと退学になっちゃて
　　んでもって、こっちの方は、兄弟も居るから
　　行き易いと思ってさ」
誠悟「住む家はあるのか」
（退学はノータッチかよ）
俺は心中で突っ込む
誠悟が心配そうに聞いてくる
八坂「もちろん無い、だから野宿でもしようかなと、思ってたんだ」
誠悟「だとすると妹はどうしたんだ？」
誠悟が聞き返してくる
八坂「一緒に来たよ、てっ、忘れてた」
八坂は思い出したように慌てて話し始めた
八坂「橋においてきた」
誠悟「家が決まるまで、家に来ないか？」
誠悟は提案した
八坂「良いのか？」
俺は少々驚く、今は藁にもすがりたい思いだ
俺は野宿でもかまわないのだが　月星さんには少々きつい様な気がする
そんな事を思っていると　誠悟と一緒に括り付けられていた女が口を開く
女「せいちゃん、この人誰？」

誠悟「ああ、忘れてた紹介するよ
　東京に居たとき、色々と助けてもらったんだ」
八坂「初めまして、八雲八坂と申します以後お見知りおきを」
女「服部彩です、よろしくね」
そんなこんなで服部彩と握手する
そんなグット（バット）なタイミングで妹様がやってきた
月星「こんな所で、他の女なんかにうつつを抜かしてたのね」
などと言ふにチョークスリーパーをいきなりかけられる
しかもメッチャ入ってます！
八坂「ちょ、タップ、タップ」
もう落ちる寸前
八坂はそう言いながら妹の手を軽くたたく
誠悟「月星さんその位でやめておいた方が…」
月星は驚きの表情で二人を見つめる
周りが見えてないのか？　この妹様は
しかし、このままでは俺の命に係わるので
事の顛末を話し、月星の誤解を解く
そして誠悟の家へ向かう
その道中八坂は胸中に思いを抱く

誠悟たちは知らないであろうこれが必然である事を
これが破滅の道であることを
これが俺の選んだ終焉への物語である事を
俺の余命　陸ヶ月　ここで燃やし尽くす
それまで俺は誠悟達をそして刀を守り抜く
この命を懸けて、この体を駆使して
今まで研鑽してきたこの技を尽くして
俺は誠悟の唯一振りの刀と成る
そんな思いを抱き悪鬼と成った男は征く
男は最早人間では無い悪鬼である、修羅である

彼等の前であったからこそ現さなかったが
紛れも無い人斬りである
感情も無く人を斬捨てる唯一振りの刀である
いや刀と成ったのである
男は征く歴史を壊すために
物語が終焉へ向かって歩き始める
悪鬼の物語が…

そう、これからがこの物語の始まりなのだ
時が歴史が狂い始める
正史から外れた物語へと
そのことを知っているのは
この世に八雲八坂と…

そう、これから語るのは
遠い、遠い昔話だ
それは今も鮮明に思い出せる
これはある夏から秋に掛けて
悲しい青春のお話し

第壱話　再会（異説）そして始まり　了

第壱話　再会《異説》そして始まり（後書き）

第壱話如何でしたか？
出来ればで良いのですが
もしこの小説を読んで下さる
人がいるのならば
出来れば感想を書いて欲しいです
もしも、出して欲しい技等がありましたら
リクエストしてください出来る限り
期待に応えたいと思います
それでは、次回、また会いましょう。

第弐話　居候生活、主従関係？の構築（前書き）

意外と早く代弐話が出来ました
楽しんでください

第弐話　居候生活、主従関係？の構築

八坂「と言う訳で、本日よりお世話になります」
八坂「八雲八坂と申します、よろしくお願いします」
俺は、とりあえず世話になるので、挨拶をする
誰にって？　それは勿論　誠悟殿とその妹様にございます。
どうやら俺は、色々な意味で妹という存在に弱いようだ
こればかりは如何に鍛錬しようとも、強くなれない様だ
まぁ、いきなりこうして挨拶をしているのも、不自然なので
とりあえず回想をご覧ください

八坂「しかし、誠悟、本当に大丈夫なのか？」
俺は、不安になり、聞いてみる
誠悟「何がだ？」
しかし、とうの誠悟は理解していない様子だった
八坂「いや、だから、私があなたの家に泊まる話なのよさ」
いつもの癖で一人称が変わる
しかし誠悟は慣れているのか気付いていないのか気にしない
誠悟「ああ、その話か、大丈夫だと思う」
八坂（大丈夫だと思うって）不安だ
そんな事を話ながら誠悟の家へ着く

彩「せいちゃん、それじゃぁ後でね」
そう言って綾は家へと帰った
八坂「ここが、誠悟の家ねぇ」
思っていたより立派だった
誠悟「その言葉、皮肉としか受け取れないぞ」

誠悟は恨めしそうに言う
八坂「あぁ、東京の本家の事か、住む人が居なくなったから
　　売っ払った」
誠悟「売った！」
誠悟は心底驚いているように見える
いや、事実、驚いているのだろう
八坂「大切に使ってくれる人に売るのが一番だろ」
私は爽やかに答える
しかし、誠悟はシマッタと言う様な表情に変わる
八坂「気にするな、アレは必然なんだから」
そう俺は答える
誠悟「必然？」
訝しげに誠悟はこちらを見る
八坂「きっと、運命なんだよ…」
俺は悲しそうな表情を浮べる
すると誠悟はバツが悪そうに話を切り替える
あたしも気まずいのでそれに便乗する
誠悟「そ、それよりも早く入ろうか」
八坂「ああ、そうだな」
月星（誠悟さんばかりお兄様と話してずるい）
ガラガラ～　誠悟は戸を開ける
すると、何かが飛来すると同時に女が怒鳴る
女「お兄五月蠅い！」
女「家の前で騒ぐな変態！」
八坂（恐い）
すると誠悟も負けじと応戦する
誠悟「ちょっ、美琴さん落ち着いて
　　人が見てるんだから」
誠悟君めっちゃ腰が引けてるんですけど
すると　みこと　と呼ばれた女は俺たちを見てハッとする

少々顔が紅くなってる様に見受けられる
八坂（ここは、小生が一肌脱ぐかな）
八坂「ミコトさんそれ位でよした方が…」
美琴「五月蠅い、この変態！」
八坂（変態！？　　死のう…）
そう思い俺は鞄から短刀を取り出し腹に当てる
それを見た誠悟と月星が慌てて止めにはいる
ミコトさんはどうせその腕を下ろせる訳無いという顔をしている
だが、しかし、誠悟と月星は必死である
それは、そうであろう誠悟と月星は知っているのだ
俺がこの腕を振り下ろせることを
しかしこれ位で死んでいては色々と申し訳が立たないので
一先ずやめる事としよう
私は短刀（ドス）を仕舞うと非礼を詫びる
八坂「お騒がせして申し訳ありませんでした」
美琴「フンッ」
そういってミコトさんは踵を返し家の中に入っていく
八坂「誠悟（兄弟）すまん」
誠悟「いや、気にしてないよ」
そう誠悟は言ふ
いつもの事だと言わんばかりに…
実際、本当にいつもの事なのだが
月星（良かった、お兄様が死なないで
　　でも死んだら死んだで一緒に居られるのに…）
八坂（何だろ、急に悪寒が…）
そんなこんなで家に入り
美琴さんの機嫌を直してから
交渉に入る
しかし結果は意外なものだった
美琴「判りました、ただし月に陌萬円（ひゃくまん）払ってもらいますから」

そう美琴は言う
そして美琴は心の中でそう思う
美琴（払える訳が無い…）
美琴（絶対にこの家にこの人達を泊めない）
美琴（そう、絶対に…）

この事から考えるに＜美琴さんは泊める気が無いようです
しかし、相手が悪かった…

不可能は無いと言われる、八雲八坂に、この勝負は分が悪かった

月星（馬鹿ですね彼女は…）
月星（お兄様が払えないと思って言っている
　払える場合を考えてない、お兄様はきっと払う…）
月星（自分の為ではなく、愛しい妹の為に…）
月星（家を売ったお金があるのだから、そう言えばお兄様
　最近、株で一儲けしたとか言っていたような気が…）
まあいい
月星は心底でそう思っていた
八坂は心の中でニヤリと笑う
八坂（佰萬（ひゃくまん）如何やら俺たちを泊める気はさらさら無いようだ
　だがしかし彼女は大事な事を見逃している）
八坂（それは何か、決まっている、払える訳が無いと思って言っているのだ
　払える場合を考えていない…）
八坂は人が嫌がる事がをするのが好きである
そう　善くも　悪くも
人をイラつかせるのが好きである
そしてこの時もまたその悪い癖が　病が　発病した…
今、手元には家を売り、そして、この島で買う家のお金が入ってい

る　捌仟萬円ほど
通帳には株で一山当てた資産が入っている　拾伍億円ほど
その内から百万円など　常人から言わせれば仟伍佰捌拾円
の内から毎月壱円引かれる様なものなのだ

誠悟（やばい、非常にヤバイ、八坂なら払う…）
誠悟には確信がある
八坂の性格を知っているから判ってしまう
そう、八坂は人が嫌がる事がをするのが好きである
人の期待を裏切るのが好きなのである
今、美琴は八坂が払える訳が無いと思って言っている
八坂は、美琴の期待を裏切り
？然とする顔を拝もうとしている
東京に居た時も、この様な事があった。
そのときも同じく、払ったのである
東京に居た時も、俺が住んでいたマンションに入り浸っていた
その時、確か弐拾億円ほど有ったはずだ零が多すぎて数えられなかったけれども…
誠悟（止めなければならない）

誠悟「いくらなんでもそれはチョットきついんじゃ」
誠悟は反論に向おうとしていたが…　予想通り
美琴「お兄は黙っててて！」
誠悟「ハイッ」
反論できなかった
むしろそれどころか火に油を注いでしまった

八坂「壱百萬！？」
八坂は驚いて見せた　そう　あくまでも　驚いて見せた　のである…
ここから美琴の猛攻が始まる

実際は美琴が自分で自分を追い込んでいるに過ぎない
美琴「そう、壱百萬、払えないならこの家には泊まらせませんから」
美琴（お兄との時間を邪魔されてなるものですか）
しかし、美琴にとっては意外な回答が
誠悟と月星から見れば予想通りの回答が出される
八坂「良いですよ、とりあえず半年分払いましょう」
八坂はまるで新聞の集金を払うように言い放つ
月星（やっぱり…）
誠悟（やっぱり…）
月星と誠悟は予想より斜め上をいく回答に飽きれるばかりである
だが美琴は、その回答が信じられなかった
美琴「なっ、陸佰萬万円ですよ、陸百円じゃないんですよ！」
美琴は聞き間違いだと思いたかった
八坂「ええ判ってますよ」
だが八坂はやはりあっさりと言ってのける
美琴「現金一括払いですよ」
なおも美琴は反撃する
だが八坂は左手を挙げ月星に鞄を持つジェスチャーをする
すると月星はそれを見て取ってすぐに鞄を取る
月星「はい、お兄様」
八坂は渡された鞄を取ると、ジップを開け
中から札束を陸つ取り出す
八坂「はい、現金一括払いで六百万円
　　不安なら数えてくれて構わない」
そう、ゴミでも捨てるように無造作に置く
美琴「お兄、何か言ってやって」
そう誠悟に言う
しかし誠悟は何も言わない　言えないのだ
と言う訳で今に至るというわけだ

気のせいか回想の俺どっかの越後屋みたいだな
というか気持ちの描写が俺だけじゃなかった気がする…
まあいいか

美琴「伊東美琴ですよろしく」
そっけなく挨拶する
まぁ無理も無い…
八坂「こちらこそよろしくお願い致します伊東美琴様
　　そして、伊東誠悟様これから何卒よろしくお願い申し上げます」
俺は挨拶をする
理由は簡単　これから世話になるのだ　居候するのだ
これ位の事は当然である
月星「八雲月星にございます。これから、兄共々よろしくお願い申し上げます」

こうして俺達は居候生活を始め主従関係？を構築した

しかし、そんなやり取りをしている頃
海岸ではとんでもない事が起こっていた…
そのお話は次の機会に

第弐話　居候生活と主従関係？の構築　了

第弐話　居候生活、主従関係？の構築（後書き）

次は海岸お話です
それではお楽しみに
どなたでも気軽に感想を
お寄せ下さい
参考にしたいと思います

第参話　覚悟・決意・業を背負う者（前書き）

出来ました
思うままに書き綴りました
よろしくお願いします

第参話　覚悟・決意・業を背負う者

第弐話にて八坂達が家で色々やってる　同時刻
海岸にてある男が目を覚ました

男「俺はまた負けたのか…」
この男は第壱話にて登場し八坂に秒殺された高田重行である
高田「俺は弱いのか？」
いやそんな筈は無いと言い切れずに居た
何故、俺はあいつに敗れたのか
それは判っている
俺とあいつの背負う業の違いだ
罪の違いだ
あいつはオレには考えられないほど重い業を背負って生きている
俺にはその業を背負う覚悟は無い
そう覚悟の違い
あいつは最早、修羅
いや悪鬼と呼んだほうがいいのかも知れない
高田「八雲流活殺術か」
思わず、そう口にする
だが俺の我流魔剣には敵うまいであろう
あの剣を使うか
偶然にも八雲姓は同じ
だが違う八雲という人が打ってくれた刀
刀鍛冶の八雲
刀匠の名は八雲　四条（しじょう）

その男は生涯に仟振りの刀を打ったと言われている
そして、玖佰玖拾振り目からその性能は凄まじく斬れない物は無いと言ふ

八雲鍛冶曰く人生最後の作　すなわち魂の作は鍛冶師の意思が宿ると言われているらしい
もっとも俺のは九百玖拾弐振り目である
だがその刀は恐ろしいほどに切れる。
故に俺は恐ろしくなり、巻き藁を壱度だけ、斬って終わった。
それ以来使っていない。
だが最早迷いは捨てる
奴と同じく一振りの刀となる
さすればあいつと対等だ
そう、俺も悪鬼になる…

高田「おい、お前ら起きろ」
チンピラ三人「あっ、高田さん！」
男たちはあわてて起き上がる
高田「おれは決めた」
高田はイキナリそう言った
男たちは声をそろえて聞く
何をですか？と
高田「刀を抜く！」
男たちにはそれだけで十分理解できた
男たち「本当ですか！？」
ついに覚悟を決めたんですねと男達は言う
「ああ、だから、みんなで行こう」
はい！そう言って付いてくる
そして、高田は刀を腰に差す
皆はその姿をみて泣き出す

感動のあまり
高田も泣いている
感情を流しきる為に
刀となる為に

チンピラA「兄貴、刀を抜いて見せてくださいよ」
男は胸を弾ませて高田にそう言う
高田は答える
「一寸先に逝っててくれ」　地獄へ
男三人「はい！行ってきます」誠悟の家へ

我流魔剣
チン　チン　チン
鯉口と切羽が触れ合う音が三度する
そしてドタ　バタ　ゴト　ドタン　バタン　ドシン
と言う音がする
そう、高田は自分の仲間を斬殺したのだ
高田は、いや、かつて高田で有った者は、地の底から響くかのような声で言う。
「飛燕剣」と
八坂の零閃は高田の知る限り
そう高田の知る限り瞬速の一閃である
対してこの飛燕剣は人が瞬きする間に三度抜き差しできる究極の居合いである
魔剣である　この技を使って負けたことは一度も無い
この技にて八雲八坂を倒すのが高田重行の贖罪である

この夜一匹の悪鬼が誕生しそして同時に一振りの刀が生まれた

男はこの日

業を背負って生きる覚悟をし
八坂を葬る決意をし
そして仲間殺しの業を背負う者となった

八坂と戦うのは何時になるかはわからない
どちらが勝つかも判らない
ただ勝負は居合いの勝負になる事であろう

男は八坂との死合での勝利を胸に思い描きながら
かつての仲間の遺体を埋める
男は泣かなかった
いや泣けなかった
泣くときは八坂に勝利した後
仲間に詫びながら自決するときと誓って。

こうしてまた一つ歴史が変わる…

第参話　覚悟・決意・業を背負う者　了

第参話　覚悟・決意・業を背負う者（後書き）

本当はつくる予定のない話でしたが
高田さんが余りにも不憫なもので書いてみました
さぁこの話で出てきた八雲四条とは何者なのか
それはいつかお話したいと思います
この話で実は八坂の過去が少し分かると思います
それでは次回ご期待ください

第肆話　悪夢・出会い（前書き）

投稿が少々遅れました
皆さんお楽しみの人も
そうでない人も　よろしくお願いします

それではお楽しみください

第肆話　悪夢・出会い

俺は今　ユメ　を見ている
そう　ユメ　これは　ユメ　である
そう自覚する
いつも見ている、俺の過去
今の俺の始まり
しかし、今日は如何やらいつもと違うようである
今日は、姉のユメである
姉の名前は八雲　十六夜（いざよい）
綺麗な人であった
そう、あった
姉さんは死んだのだ，殺されたのだ
　だれに？
俺にである…
俺は今もその業（殺人）を背負いそして重ねていく
何故かと問われたらこう答える…

八雲流活殺術がこの世で最強であり
そして　八雲の作刀法　が最も強靭であり
最も良く斬れる事を証明するため

そう答えるであろう　表向きは…

十六夜「誰も殺してはなりません、一人殺せば一生を闇に生きるしかないのです」
姉さんはそう言った
十六夜「武とは、矛を止めると書いて武の一文字。
　そして、最良は和を持って尊しとす」

そう、何があっても殺してはならないと言った
何があっても争ってはならないといった
そう、確かにその通であった

八坂「断じて否、矛にて止むで武の一文字！」
普段では絶対口答えすることの無かった俺は
そう言い放ち戦った
そして、姉さんをこの手で…
姉さんは、最後にこう言い残した
十六夜「この鈴を
十六夜「貴方は、貴方の道をお征きなさい
　私は、それを貴方の最期の時まで見守ります…」
そう、言ったのだ
白い着物を
雪のように白く透き通る肌を　血で濡らし
血刀を持つ姿は美しかった

そのときの姉さんは
私が見た中で一番　綺麗であった

俺がその姿に見惚れている時に男の声が頭の中にビリビリと響いた
気がした
「御堂」　と
そして、その声の主はこの世の真理を告げる

俺は、姉さんの言葉をかみ締めながら
男が告げたこの世の真理を理解して
朋を殺した

家族を殺した
そして最後には…

この世は如何な事があっても
善悪相殺(ぜんあくそうさつ)
愛憎相殺(あいぞうそうさつ)
盛者必衰(じょうしゃひっすい)
生者必滅(せいじゃひつめつ)
である。
そう、如何な事があっても…

だから俺は体現する
男の告げた真理を
弐つの理(ことわり)を
善悪相殺
そして
愛憎相殺
この弐つを
その為に俺は心鉄(しんがね)に刻んだ
そう、文字通り心鉄にだ
鉄にその理を、決意を刻み
そして心臓付近に埋め込んだ
人の心は移ろい易い
故に鉄に刻み込む
二度と忘れない様に
そう二度と…
ユメ　の中で俺はそんな事を思い返していた。

　あの日からは殆ど無かったが…
不意に気配を感じ目が覚める

ゆっくりとにじり寄って来る
しかし、其処には、殺気は無かった
だが念には念を入れて
俺は相手に気付かれぬ様、愛刀の鍔をゆっくりと押し上げ
鯉口をきる
そして、ゆっくりと目を開ける
するとソコには此方を心配そうに覗き込む、月星がいた

月星「お兄様、大丈夫？
　　何かにうなされていたみたいだけれども」
そう、心配そうに月星は答える
八坂「気のせいだ、いや
　　一寸夢見が悪かった…」
確かに夢見が悪いにはかわりが無いので良いだろう
コイツには知られたくない
しかし、月星はいまだ心配そうにしている

八坂は話題を変えようととりあえず時間を聞く
すると月星は一瞬戸惑ったが何かを察したのかすぐに答えてくれた
月星「今は参時半です」

いつもより一時間早いが島の地理などを理解したいので
稽古を始める事にする
地理に長けていれば、それだけ戦闘が有利になる
日々の鍛錬は重要だ
優れた身体能力はどんな時でも裏切らない
だがそれはあくまでもステータスに過ぎない
そこから＋αで地理や知識そして経験が必要になる
机の上でいくら勉強し知識を身につけても経験がなければ
有効に活用できない

逆に経験だけ有っても知識が無ければその経験を生かせない
だから八坂は最強である為に知識を身につけ
血の滲む様な修練をし実戦を積んできた
試合をし　そして　死合　にまで手を出した
其処までしても尚もまだ強くなろうとする
何故かと問われたら八坂はこう言うであろう

選んだからだと
血で血を洗う事を選んでしまったから
修羅道へ堕ちる事を
悪鬼になる事を
ただ一振りの刀となる事を
だから俺は前へ進む
最早、後戻りは出来ないのだから

そう答えるであろう　表向きは…
いや、それも戦い続ける理由の一つである

だが一番の理由は違う
今まで殺してきた者の為にも
八雲八坂は死ぬまで最強である
そう自分に言い聞かせているから
易々と死ねないのだ
俺の命は一文にもならない
だが、俺の殺してきた者の命は
金では買えないほど重く、そして、高い
そんなことを心の中で想い神那島を走る

八坂（今日はとりあえず学校までの道を確認しよう…）
そう思いながら走る

が、しかし、なぜか良く判らないが
何かに惹かれるようにして
山の中へ入って行く

しばらく走ると、廃屋が見えた
そこへ出ると、何か気配を感じる
誰かが意図的に気配を消そうとしている
隠れようとしている
その気持ちを汲んで気付かない振りをしたい所だが
そうする訳にもいかない
八坂「そこに居るんだろぉ、出て来いよ…」
後ろのほうに誰かが居る気配がし
そして、そこから明確な殺意を感じる
故に問うた積もりだが…
　ガサガサ　　と
前方から音がし
一人の女が出て来た
後ろの気配は未だに消えない
それどころか、むしろ、禍々しい物に変わってゆく…
そんな事を知ってか知らずか
女は出てくる
長い黒髪、道着に身を包んだ姿は
大和撫子とでも申しましょうか
最も手に抜き身の真剣が無ければの話である
余人が見れば逢引きにでも見えそうな気がする…

俺の女に対する最初の印象は
綺麗と言う言葉と同時に
強いという言葉が出るだろう

女「……」
女は何も言わない
それどころか目を瞑って答えることを拒否している
まぁそれはよしとしよう
だが真剣だけは納めてもらいたい
ので仕方なく言葉を発する
八坂「スミマセン、刀を納めて貰えませんか？」
すると女は目を開けるが　キッ　と睨んでくる
俺はその目に女の過去を見
その体からは血臭がした　ただそう感じただけかも知れないが
この女は人を殺している
それも、一人や二人ではない
数多の人間を手にかけている
だが、それは、恐らく自身の意思ではないのだろう
そう、教え込まれたのだろうと

俺とは違うのだろうと思う

女は、渋々、刀を納めるが
俺に隙があれば何時でも斬り付けて来るだろう
俺の武術家としての眼で見れば
この女は相当やる
殺す気で戦うならさして問題にはならないだろうが
殺さず、かつ傷付けずに戦うとなると、かなり難しいだろう…

そんな事を考えていると
後ろから　ガサガサ　と
音がする

俺の目当ての気配の主

そして、その主が現れる
目の前の女は、少々驚いていた

俺は後ろを振り返る
すると、そこには案の定、奴がいた
そう、高田重行が居たのだ
八坂「高田、重行…」
だがしかし高田は昨日の高田とはまるで別人だった
その顔には昨日までは無かった
深い悔恨と憎悪と苦悩に満ち溢れ
そしてその身体からは濃い血の匂いがしていた

この女には判らないであろうが

俺は高田と目が合う　いや　合ったような気がした
高田が地の底から響くような声で言う
「八雲・・・・・・八坂！」
その声に釣られたのかはたまた殺気に反応したのか
小熊がそこから出てきた
小熊は牙をむき、高田へ襲い掛かる
女は驚いている
俺はそのまま高田から眼を離せずに居る
俺が高田から眼を離せば
恐らく高田は斬り付けてくる事だろう
故に俺は目を離せない

高田は俺から眼を離し
襲い掛かってくる小熊を居合いにて斬る
チン

と音がした
しかし一度の音なのに熊を二度斬った
一の太刀で頭部から真っ二つにし
二の太刀で胴を両断した

だが俺はその絶技よりも
男の刀に目を奪われていた
その刀は紛れも無く
八雲四条・親父の作である
玖佰玖拾弐　振り目の刀
銘　八雲四条作　玖玖弐
親父の作の中でも晩年の物だ
親父の遺作…

小熊は断末魔を上げながら四つに分かれる
その声を聞いた親熊が駆けつけてくる
高田はその熊から逃げる
高田は逃げながら言う
この「飛燕剣（ひえんけん）」でお前を斬ると

親熊は高田を追わず俺の前に止まる
八坂「チィ　あの野郎、面倒なもん残していきやがって…」
俺は舌打ちをする
八坂「持ってろ」
俺は手に持っていた杖を女に投げ渡す
女「なっ！？」

熊がその隙を見逃すはずも無く　立ち上がる
熊は大きかった
男の身長ほどは有るであろうか

それほどの大きさだった
だが俺は臆さない
熊は腕を振り上げ引っ？きにくる
しかしそれは生身の人間にとっては引っ？くだけでは止まらない
まず　間違いなくまともに喰らえば　即死だろう
熊は水中に居る鮭を水ごと陸に飛ばすほどの腕力を誇るのだ
生身の人間がその威力を受け止められるわけが無い
　どうする！？
八坂（肋　三枚下　熊の心臓がある
　　人間よりも肉が厚く臓器も体の奥にある
　　腕では力が時間が足りない…）
八坂（肋三枚下の心臓を　蹴る！！！）
八坂「フンッ！」

八坂は息を短く鋭く吐く
同時に八坂の右足は唸りを上げる
ゴッ　と音がする
そして、熊は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた

女（一撃！？）
女（何だこの男は…）

八坂は固まった女から杖を受け取り去ろうとする
八坂「そうそう、その熊　落しただけだから
　　貴女も早くここを去ったほうがいい…」
八坂はそう一言だけ言ってからその場をさった

八坂は来た方角へと帰ってく
平然と背を向けて
しかし、女が八坂の背に斬撃を入れることは無かった

なぜなら、その時の八坂には恐ろしいほどに隙というものが無かった
いや、隙はあるにはある、髪の毛のように細く薄く
緩みのようなものがある
しかし打ち込める気がしないのだ
いや、打ち込もうとすると切り落としにて
殺される　姿　を幻視した
故に打ち込めなかった

男は去ってゆく

だが不思議とこれが別れとは思えなかった
むしろ何かの始まりの様に思えた
今は不要な思考はやめよう
もういい時間だ
学校へ行く準備をしよう…

そう思い女はその場を後にする……

高田は女が去った後
親熊の元へ向う
そして笑いながら　狂気に顔を歪めながら
親熊を切り刻む

高田「八坂！！！！！……
必ず斬る！！！」

高田は魂の叫びを上げると

刀がそれに従うように
高田だけに聞こえる音(こえ)が
キーンと嬉しそうに聞こえた

二人の決着はいつになるかわからない
しかし
どちらが勝ち　どちらが負けても
双方無事では済まないだろう……

第肆話　悪夢(ユメ)　出会い　了

第肆話　悪夢・出会い（後書き）

如何でしょうか
なんだか質が低下しているようなきがします

それでは
次回
お楽しみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8008x/

紅色に染まる夏

2012年1月10日02時47分発行